学びや タイムスリップ

㊽ 戦後の食糧増産と児童 （昭和時代）

労働力で動員され続け

終戦直前は、物資不足の中で食べる物がなく、麦わらを粉にしてメリケン粉で固めただけのいわゆる「黒パン」が給食で出されるなど、今日では口にすることのないものが児童の食べ物でした。

ただし、終戦後すぐに食糧難が解消されたわけではありません。「玉音放送」の翌日、1945（昭和20）年8月16日の緊急全市学校長会議では、知事より「皇国再建」のための「食糧増産」強化の方針が伝えられます。

配給の遅れや激しいインフレ、軍人の引き揚げなどで、戦中よりも食糧状況は悪化していきました。食糧増産は、敗戦国日本が直面した大きな課題で、飢えと栄養不足は戦時中をしのぐものとなっていったのです。

同年9月の雑誌『週刊少国民』には、終戦後の食糧増産を象徴する写真が掲載されています。「桜井駅跡にふるふ鍬」と題されています（写真①）。

「桜井駅」とは、『太平記』において、楠木正成が足利尊氏の大軍を迎え撃つため子の正行（まさつら）と別れたとされる場所です（現大阪府島本町）。戦前の楠木正成は、南朝の天皇を守るために戦った忠君の烈士として描かれ、「桜井駅」は修身などの教科書に載り遠足の定番コースでした。

このように1カ月前まで「聖地」のような扱いを受けていた「桜井駅」跡とされる場所の近くの公園に、終戦直後に児童が鍬を下ろし、開墾しているのです。

「青葉報国農園」と命名されたこの畑は、近くの国民学校5年生以上約600名が毎日、一人一日半坪開墾したとされ、総面積は1万数千坪と書かれています。真偽のほどは分かりませんが、このように児童を労働へと向ける「教育」的記事が掲載されたということ自体が、当時の様子をリアルに映し出しています。

一方、京都市でも児童が労働力として動員され続けていました。各学校のグラウンドに作られた学校農園は終戦後もそのまま農園として耕し続けられたのです。特に山間部の学校では盛んに開墾が進められたようで、46年の宕陰国民学校（右京区）では甘藷（かんしょ）、大豆、きびなどが栽培されていたとの記録が残っています（写真②）。

（京都市学校歴史博物館 学芸員 和崎光太郎）

◇

今回紹介した資料は、学校歴史博物館（下京区）で開催中の企画展「戦争と学校―戦後70年をむかえて」で展示しています（水曜休館）。

櫻井驛跡にふるふ鍬

楠公父子の忠孝にゆかりの深い新京阪線櫻井の驛跡前の〝青葉公園〟一萬數千坪が、湖水の流れをくむ地もとの大阪府三島郡島本町國民學校の兒童たちの手で農園化されることになりました。その名も〝青葉報國農園〟と改め、五年生以上約六百名が毎日鍬をふるつてゐます。一人一日半坪開墾の意氣込みで、九月末までにすつかり耕してしまひ、ここに小麥や大根、人參などを植ゑつけることになつてゐます。

上写真1、「櫻井駅跡にふるふ鍬」の記事（『週刊少国民』1945年9月16・23日号）
下写真2、本年度食糧増産学校農場経営機構（『本校教育之概要　宕陰国民学校　宕陰青年学校』より）＝宕陰国民学校、46年10月